

## イスラーム地域研究 (IAS) 活動報告より

---

### KIAS ユニット2・大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト・「回儒の著作研究会」共催研究会

(2009年1月11日 於大阪大学世界言語研究センター)

発表題目:「近世における中国イスラーム漢籍の出版」

発表者: 佐藤 実 (関西大学)

発表題目:「清代ムスリム・コミュニティの宗教的秩序を担うもの——経師とアホン——」

発表者: 黒岩 高 (武蔵大学)

2009年1月10日、大阪大学世界言語研究センターにおいて、「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクトとの共催で、KIAS ユニット2「中道派」ユニット研究会が開催された。本研究会では、佐藤実氏による発表「近世における中国イスラーム漢籍の出版」と、黒岩高氏による発表「清代ムスリム・コミュニティの宗教的秩序を担うもの——経師とアホン」が行われた。これまで中道派が研究会で扱ってきた地域はパキスタン、トルコ、エジプトであるが、この研究では近世以降の中国ムスリムを対象とした。ただし、佐藤氏がメディアの問題、黒岩氏が経堂／マドラサを主題としており、中道派研究にとってなじみのあるテーマが並んだことになる。

佐藤氏は、回儒と呼ばれる中国ムスリム知識人に関する考察を中心に発表を行った。昨今の中国では、イスラーム漢籍の叢書が陸続と出版されており、『回族典藏全書』など中国ムスリムの間で大きく取り上げられているものもあり、今後の研究発展に期待が寄せられている。佐藤氏は、明朝期～清朝期に活躍した王岱輿、馬注、劉智、馬徳新ら四大経学家の経歴・著作について概観し、イスラーム漢籍の形式・内容について解説した。その内容は、思想哲学、儀礼解説・マニュアルが中心であった。また、江南地域、成都、雲南、光州、福建など主要出版拠点における出版物やその内容、さらには各拠点間の交流などについて、詳細な考察が行われた。残念なことにこれら著作家と主要出版拠点が当時の中国ムスリム社会、ひろくは中国社会とどのようなつながりを持っていたのかはまだ分かっていない。中国ムスリム文化を研究する上で大きな課題である。

黒岩氏は、経堂教育の担い手である経師の16～18世紀の中国社会での活動について発表を行った。経堂教育とは16世紀に活躍した胡登洲によって創始され、その後数世代をかけてムスリム知識人育成カリキュラムが編成された。経堂教育はムスリム知識人育成の他に、ムスリム・コミュニティ改革運動としての側面もあった。ムスリム・コミュニティでは、イスラーム經典に通じ、行いに優れた者(≡経師)がリーダーとして内的秩序を担うべきとする意識が次第に浸透した。結果、宗教関連事項について経師(≡アホン)が決定権を把握する「アホン教長制」が成立した。次いで、経師とコミュニティの関係性の考察がなされた。一般的に「経師」は各ムスリム・コミュニティによって招聘され、中国各地を頻繁に移動し、少ないものでも数箇所、多いものでは20～30箇所のコミュニティに赴いた。このような「経師」の招聘は、「延師」と呼ばれ、原則的に他のコミュニティからおおよそ3年ごとに行われた。しかしながら「経師」の活動はムスリム・コミュニティ内に留まるものではなく、中国社会一般に対しても行われ、それを顕著に示したものが、漢文を用いたイスラーム典籍の翻訳と著作活動である。彼らの執筆動機には、ムスリム・コミュニティ内部の漢字

識字層からのイスラーム知識獲得の要求にこたえるといった対内的視点だけでなく、ムスリムの慣習批判に対する護教的目的や漢人知識人層に対してムスリムの文化・世界観の高度さを認知させることといった対外的視点にも根ざしていたことが指摘された。彼らには、儒学に代表される中国伝統思想との対比の中で、自らの「正統性」を主張しようとする傾向があったが、中国ムスリム経学が中国伝統文化の一部として認識される状況には未だないと黒岩氏は指摘した。

両発表は、中国で展開したイスラーム教育とイスラーム知識の普及運動と、それらの中心的な担い手であった経師と同時代のムスリム・コミュニティの関係、さらには同時代社会との関係にまでおよぶ広範な研究報告であった。また本研究会の重要な中心的テーマである中道派と多数派としての合意形成過程、また対他関係における集団同士の関係性を捉える上で非常に意義深い報告であった。なお質疑応答の過程で、南アジアの出版文化との比較も提言され、中道派研究にとって実りのある研究会だったと評価できる。

報告者：横田 貴之（日本国際問題研究所）、黒田 賢治（京都大学）

**KIAS・京都大学 G-COE 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」イニシアティブ1・日本学術振興会科学研究費基盤（A）「現代アジア・アフリカ地域におけるトランスナショナルな政治社会運動の比較研究」（東京外国語大学）共催国際ワークショップ**

**“Middle East & Asia Studies Workshop New Approaches in Central-South Asia and Middle Eastern Scholarship”**

**（2009年2月7日 於東京外国語大学）**

February 7 (Sat.)

9:50–10:00 Welcome and Introduction: SAKAI Keiko (Tokyo University of Foreign Studies)

10:00–12:00 Keynote Speech

Prof. Kamil MAHDI (University of Exeter UK)

“The US Occupation of Iraq in Perspective”

12:10–14:00 Session 1

Speaker 1: YAMAOKA Dai (Kyoto University)

Title: “The Hidden Surge of the Shi’ite Religious Establishment in 1990s: A Social Movement of the Second al-Sadr in Iraq”

Speaker 2: Intissar AL-FARTTOOSI (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: “Why the Number of IDP did Increase after 2006 in Comparison with post-2003?”

14:30–16:30 Session 2

Speaker 1: Mohamed Omer ABDIN (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: “Peacemaking as a Tool for Survival: Why did Authoritarian Regimes Manage to Reach a Negotiated Settlement in Sudan?”

Speaker 2: HIRAMATSU Aiko: (Kyoto University)

Title: “Democracy and Islam in Kuwait”

16:45–18:45 Session 3

Speaker 1: SUNAGA Emiko (Kyoto University)

Title: “Creation of Pakistan as a ‘Muslim Nation-State’”

Speaker 2: Sayed MUZAFARY (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: "Ethnicity, Lack of national integration and Prospect for Further Democratization in Afghanistan"

February 8 (Sun.)

10:00–11:20 Keynote Speech

Prof. KOSUGI Yasushi (Kyoto University)

"Islamic Revival Revisited: the State of the Study and our Prospective Tasks in Japan"

11:30–13:30 Session 1

Speaker 1: TOCHIBORI Yuko (Kyoto University)

Title: "Al-Amir 'Abd al-Qadir al-Jaza'iri: What Shaped his Figure"

Speaker 2: YASUDA Shin (Kyoto University)

Title: "Formation of Religious Tourism in Contemporary Syria: Transformation of Ziyara in Shi'ite Islam"

14:30–16:30 Session 2

Speaker 1: Maja VODOPIVEC (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: "Film Narratives after Breakup of Former Yugoslavia and How They Supplement with the Historical Reality"

Speaker 2: IIDA Reiko (Kyoto University)

Title: "Transformation of Tamasha in State of Maharashtra, India: From Folk Arts to Public Culture"

16:45–18:45 Session 3

Speaker 1: Esen URMANOV (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: "Transformation of Clan Politics into Party Politics in Kyrgyzstan (2005-2008)"

Speaker 2: KINOSHITA Hiroko (Kyoto University)

Title: "Islamic Higher Education in Contemporary Indonesia: Through the Islamic Intellectuals of al-Azharite Alumni"

18:45–19:00 Closing

本ワークショップは、昨年度から開始された若手研究者を中心に組まれた、ユニット1～5までが共同で行う国際ワークショップである。今年度は一年に二回開催する予定であり、本ワークショップは8月2日、3日に行われたワークショップに続き第二回目にあたる。2日間にわたり、6つのセッションで実施された。以下、セッションごとの議論を簡単に振り返りたい。

第1セッションは、イラクにかんする報告2本で構成されていた。第1の報告では、1990年代イラクのバアス党権威主義体制下で発生した社会運動が取り上げられ、権威主義体制下で厳格に管理・抑制されていたはずのイラクで、なぜイスラーム主義を掲げた社会運動が大きな動員力を持つにいったか、という問題が分析された。報告者により、バアス党政権の政策とイスラーム主義社会運動の戦略の奇妙な一致にその原因が求められたが、より緻密に政治経済構造との関係を提示すべきではないかとのコメントが寄せられた。第2の報告では、2003年米軍がイラクに侵攻したのち、なぜ2006年以降になって国内避難民が急増したのか、という問題が論じられた。2006年に発生したシーア派聖地への爆破事件が宗派対立を醸成する大きな契機となったと結論づけられたが、実際は宗派主義ではないとの議論も同時に展開されたため、どちらがテーマなのかを明らかにするべしとの意見が寄せられた。

第2セッションは、キルギスタンとインドネシアの事例が報告された。第1のキルギスタンの報告では、議会政治の性格が、氏族を中心とするものから政党政治へと変化したことが、議員のプロフィールや計量分析などを巧みに用いて証明された。論旨は極めて明確で、主張もクリアだったが、議員のプロフィール分析に用いたデータの提示がなかったために、分類の妥当性に対する疑問が提示された。第2のインドネシアの事例では、カイロのアズハル大学に留学したインドネシア人留学生が、帰国後にインドネシアのイスラーム高等教育にどのような影響を与えているかを分析したものであった。若手の留学生を中心に、祖国から遠く離れたカイロで、インドネシアのイスラーム実践の多様性に触れたのち、祖国でその多様性を架橋する形でインドネシア的なイスラーム教育を再構成していく姿が描かれた。

第3セッションは、パキスタンの国家形成についての報告がなされた。パキスタンの独立は、ムスリムを国民として規定する力学が働いたことを受けて、パキスタンをムスリム国民国家とする分析視角が提示された。これにもとづき、パキスタン建国史を丹念にまとめなおした報告となった。それに対して、パキスタンの現代史を、端的に言えば、ムスリム国民国家として分析する妥当性に対して慎重であるべきではないかとのコメントが寄せられた。

第4セッションでは、ボスニアとインドの事例が報告された。ボスニアの報告では、内戦の歴史が、映画制作を通じて国民に共通した歴史認識として再構築されていった、という趣旨で行われた。ただし、映画制作とその説明からは、具体的にどのようにナショナル・ヒストリーが再構築されていったのか、言い換えると、個人の記憶をナショナルなものに再構築したのか、ということが実証的に示せていないとのコメントが挙がった。インドの事例では、かつて農村部の卑猥な芸能であったものが、都市化にともなって都市の上品な芸能へと変容したと結論された。その背景には、1990年ごろからの新・新中間層の台頭と彼らの都市への移動があったという。

第5セッションでは、アルジェリアとシリアの事例が報告された。アルジェリアの報告では、反仏植民地主義闘争の指導者の思想が取り上げられ、彼の反植民地闘争が後の哲学者としての思想形成にいかなる影響を与えたかについて、歴史資料を用いた報告が行われた。質疑応答では、政治活動と思想を再構築する際のオリジナリティをどのように出していくかについて活発な議論が行われた。シリアの報告では、1980年代にシリア国内のシーア派聖地への巡礼者が増加した原因を、観光産業の強化という政策に求める議論が展開された。これに対して、具体的な統計データの提示が必要であり、観光産業の強化を主たる原因とする証拠が十分に示されていないとのコメントが挙げられた。

第6セッションでは、スーダンとクウェートの事例が報告された。スーダンの報告では、平和構築プログラムがなぜ権威主義体制下でのみ受け入れられたのか、そしてそのプログラムが権威主義体制にどのような影響与えたのか、が分析された。そこで明らかにされたのは、平和構築のプログラムが政党制の付与などの点において体制にプラスに働き、その結果、逆に権威主義体制を強化する作用をもたらしたことが明らかにされた。クウェートの事例では、イスラームは民主主義を阻害するか、という問題を一旦棚上げにし、イスラーム主義組織がどのように政治参加を行っているかという実態を分析することに主眼が置かれた。その手段として、女性組織の政治参加が取り上げられたが、イスラーム主義を掲げる女性組織の政治参加だけで、ひろくイスラームと民主主義の関係に議論を発展させていけるのか、などのコメントが寄せられた。

最後に、カーミル・マフディー教授によるキーノート・スピーチでは、イラク政治の現在と占領政策にかんする詳細なデータが提示された。イラク政治に限らず、外国軍の占領と紛争、紛争後の平和構築に興味を持つ出席者にとって、イラクの事例は極めて有益な情報となった。

多様なテーマに触れる機会であることに加え、異なるディシプリンを持つ報告者が中東経済史研究の最先端で活躍する研究者からの示唆に富むコメントを受けることができ、有意義なワークショップとなった。

報告者：山尾 大（京都大学）

**CIAS ユニット5・京都大学 G-COE 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」・立命館アジア太平洋大学・(財) 国際貿易投資研究所共催講演会「世界金融危機とイスラーム金融」  
(2009年2月16日 於東京ステーションコンファレンス会議室)**

講演題目：「顧客はイスラーム銀行をどうみているか——アンケート調査の結果から」

講演者：武藤 幸治（立命館アジア太平洋大学）

講演題目：“Islamic Finance and the Global Crisis”

講演者：Muhammad Umer Chapra（イスラーム開発銀行・イスラーム研究教育機関）

本講演会は、イスラーム経済学およびイスラーム金融研究の分野で世界的に有名なムハンマド・ウマル・チャブラ博士（サウジアラビアのイスラーム開発銀行傘下の研究機関であるイスラーム研究教育機関 Islamic Research and Training Institute, IRTI の理事）の来日に合わせて開催された。一般公開された講演会であり、ユニット5「イスラーム経済」の活動を社会還元するという意図があった。チャブラ博士は、アメリカの大学で博士号を取得の後、長年にわたってサウジアラビアの中央銀行に相当するサウジアラビア通貨庁（Saudi Arabian Monetary Agency, SAMA）で経済顧問を担当した経験もあることから、イスラーム経済・イスラーム金融の理論と実務の両方に長けており、「世界金融危機とイスラーム金融」という本講演会における講演もそのような長年にわたる理論面における研究と実務での経験を反映した重厚なものとなった。

講演では、まず、在来型金融システムの脆弱性と不安定性の根本的要因を、昨今の金融危機の発信源の1つであるサブプライムローンの特徴とその悪弊を考えることによって明らかにした。ここでは、サブプライムローンに代表される在来型金融において開発されてきた金融商品の多くにおいて、リスクを当事者間でシェアするしくみが欠如していたり、過剰な貸出に陥りかねないスキームとなっていたりしたことで、高いレバレッジや投機的行動、資産価格の高騰を誘発しかねないような構造となっていることが指摘された。その後、イスラーム金融システムの特徴が紹介され、リスクのシェアと実際の財の売買にもとづく信用の供与を大原則とするイスラーム金融システムが、在来型金融システムの立て直しに様々な示唆を与えてくれることが指摘された。

講演会にはイスラーム金融に関心を持つバンカーや法律家の多くが参加し、講演の後で行われた質疑応答の場面では核心を突くような議論が交わされた。このことは、日本においてもイスラームの理念にもとづく金融システムが在来型金融システムに対してどのような寄与ができるかについて大きな関心が払われていることを示しているものといえよう。

チャブラ博士の講演の前には、立命館アジア太平洋大学の武藤幸治教授による「顧客はイスラーム銀行をどうみているか——アンケート調査の結果から」と題した基調講演も行われ、イスラーム金融を利用する顧客の視点に立脚した貴重な実証研究の成果が報告された。

報告者：長岡 慎介（京都大学）



**KIAS ユニット5・京都大学 G-COE 「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」・立命館アジア太平洋大学共催国際ワークショップ “Islamic Economic System and Divergent Paths of Economic Development” (イスラーム経済システムと経済発展経路の多様性)**  
(2009年2月18日 於京都大学)

13:00–13:10 Opening Remarks

13:10–14:30 Session 1: Islamic Economic System and Economic Development

Speaker: Muhammad Umer CHAPRA (Islamic Research and Training Institute, Islamic Development Bank)

Title: “The Concept of Economic Development in Islamic Economics”

Discussion

Comment 1: SUGIHARA Kaoru (Kyoto University), from the framework of sustainable humansphere

Comment 2: Prof. Nabil MAGHREBI (Wakayama University) from economics or development economics

14:45–16:00 Workshop Speech

Speaker: Dr. Muhammad Umer CHAPRA

Title: “The Prevailed Financial Crisis and Islamic Finance”

Round Table: On the Current Financial Crisis

Discussant 1: Prof. KOSUGI Yasushi (Kyoto University)

Discussant 2: Mr. YOSHIDA Etsuaki (Japan Bank for International Cooperation)

16:15–18:00 Session 2: Entanglement of Islamic Economic System and Modern Capitalism

Speaker 1: Mr. SAITO So (Attorney-at-Law, Nishimura & Aashi)

Title: “Islamic Finance and Japanese Legal System”

Speaker 2: Mr. NAGAOKA Shinsuke (Kyoto University)

Title: “Toward an Analytical Framework of Entanglement of Islamic Economic System and Modern Capitalism”

Discussion

Comment 1: Prof. MUTO Koji (Ritsumeikan Asia Pacific University), from the experience of UK

Comment 2: Prof. MIZUSHIMA Takio (Tokushima University), from comparative economic thought

18:00–18:10 Closing Remarks

本ワークショップは、イスラーム経済学およびイスラーム金融研究の分野で世界的に著名なムハンマド・ウマル・チャプラ博士（サウジアラビアのイスラーム開発銀行傘下の研究機関であるイスラーム研究教育機関 Islamic Research and Training Institute, IRTI の理事）の来日に合わせて開催されたアカデミック・ワークショップである。ワークショップ・タイトルにもあるとおり、本ワークショップの主要な検討課題は、近代資本主義とは異なる経済発展経路として、イスラームの理念が掲げる経済システムのあり方からどのような提起が可能であるかを考えた上で、現代のイスラーム金融の実践をそのような異なる経済システムが邂逅する場と捉え、そのような異なる経済システムの邂逅をどのように捉えるかを検討することであった。

第1セッションでは、イスラーム経済独自の経済発展経路についての議論が行われた。ウマル・チャプラ氏による報告では、イスラームの理念における発展の概念が一般的に紹介された後で、前

近代のイスラーム世界を代表する学者であるイブン・ハルドゥーンの立論に即したイスラームにおける独自の経済発展経路の可能性についての検討が行われた。ディスカッションでは、東アジアの経済発展のあり方とイスラーム経済が示唆する経済発展のあり方の共通性についての議論が行われたほか、チャプラ氏が行ったイブン・ハルドゥーンに対する分析とは異なる角度からの検討がなされた。

続くワークショップ・セッションでは、昨今の金融危機に対してイスラーム金融がどのような示唆を与えることができるかについての報告がウマル・チャプラ氏から行われた。すでに2日前の東京での一般向けの講演会において同趣旨の報告が行われたが、本ワークショップでの報告ではよりアカデミックに突っ込んだ報告が行われた。この報告に対しては、金融論の観点から、報告では触れられなかったデリバティブのような証券化商品と並んで近年イノベーションが著しい金融商品をイスラーム金融の枠組みで捉えるべきかについてのコメントが提示された。また、イスラーム研究の観点から、金融危機に至るまでの近代における国際金融システムの歴史をどう捉えるべきかという重要な問いが提起された。

最後の第2セッションでは、近代資本主義とイスラーム経済システムが邂逅する場としてのイスラーム金融の実践をどのように捉えるかについての議論が行われた。斎藤創氏の報告では、イスラーム金融業務を日本法制下において取り扱う場合の法制度的問題点が最新の状況とともに取り上げられるとともに、マレーシアにおいてイスラーム金融業務を検討している現地法人が直面している問題が紹介された。ディスカッションでは、関連法令を先進的に整備してきたイギリスの事例が紹介され、それとの対比で議論が展開された。続く筆者(長岡慎介)の報告では、イスラーム金融の実践が依拠する理論におけるイスラーム経済の独自性と近代資本主義との共通性についての議論が行われ、人類学における entanglement の概念による分析枠組みの提示が行われた。ディスカッションでは、分析概念の妥当性やイスラーム金融理論の頑健性についての議論が交わされた。

本ワークショップには、アカデミアに属する研究者だけでなく、イスラーム金融業務に関わりのある多くの実務家も参加したことで、普段のアカデミアにおける研究会では見られない多様な論点が挙げられた。イスラーム金融に関する国際会議やワークショップは近年、世界各地でさかんに開催されているが、アカデミックな世界と実務の現場が学的な交流を行う機会はまだまだ少ない。そのような意味においても、本ワークショップにおいて超・学際的な議論の場を設けたことは、きわめて貴重な試みであったと行うことができよう。

報告者：長岡 慎介(京都大学)

**KIAS ユニット1・共同利用・共同研究拠点「イスラーム地域研究」京都拠点共催ワークショップ  
「イラン・イスラーム革命30周年——中東諸国への政治・経済的インパクト——」  
(2009年2月28日 於京都大学)**

発表題目：「イラン・イスラーム革命から30年——研究史とインパクト」

発表者：松永 泰行(東京外国語大学)

発表題目：「イスラーム革命とサダムの30年——イラクの遅れてきた革命」

発表者：酒井 啓子(東京外国語大学)

発表題目：「シリア——東アラブにおける覇権追求と革命イランの戦略的パートナーシップ」

発表者：青山 弘之(東京外国語大学)

発表題目：「イラン・イスラーム革命とレバノンのシーア派——アマルからヒズブッラーへ（1978～82年）」

発表者：末近 浩太（立命館大学）

発表題目：「革命後におけるイランと湾岸アラブ諸国との経済関係」

発表者：細井 長（国学院大学）

発表題目：「オマーンとイラン革命」

発表者：松尾 昌樹（宇都宮大学）

発表題目：「湾岸安全保障とシーア派ファクター」

発表者：保坂 修司（近畿大学）

イラン・イスラーム革命から30周年を迎えたことを機に、ユニット1「国際関係」ではこの一年間、中東は言うまでもなく、イスラーム世界全体にこの革命が与えたインパクトをさまざまな側面から取り扱う予定である。このワークショップはその皮切りであり、現代中東の専門家がそれぞれの地域に及ぼした革命の政治的・経済的な影響とその帰趨を発表・議論し、この革命を再評価するための土台作りを目指す。以下、各発表の概要と議論を簡単に振り返っておく。

小杉泰氏による開会の辞では、フランス革命、共産主義革命といったこれまでの近代革命がいずれも「世俗主義」に立脚するものであったのに対し、イラン・イスラーム革命は「宗教革命」であったところに世界史的意義があり、「革命」のもつコノテーションの違いに注意を払いつつイラン・イスラーム革命のもつアクチュアリティを再確認すべきとの認識が寄せられた。続く末近浩太氏による趣旨説明では、革命の持つインパクトを「認識」と「構造」に二分し、西洋近代にとって革命は「想定外」であったのに対してムスリムにとっては「想定内」だった（ただしすべてのムスリムにとって「想定内」だったわけではない）という認識のずれがあったこと、また「構造」を国内、地域、国際という3つのレベルで整理し、各地域、各時代、各ディシプリンからイラン革命を見ると同時に、逆にイラン革命からそれぞれの地域の研究を解き結ぶ必要があると提言された。そしてさらにこのような作業により、焦点がぼやけつつある「イスラーム復興」パラダイムをより精緻なものに組み替えることができるのではないかとというより大きな問題提起もなされた。

このように議論の下地が整えられたのち行われた松永泰行氏による発表「イラン・イスラーム革命から30年——研究史とインパクト」は、同国と国外それぞれに革命の及ぼしたインパクトについて論点を整理しつつまとめるかたちで行われた。より具体的には、国内的インパクトの側面からは、この革命の名称の整理、革命の意味合いの多重性の指摘、30年の国内体制変化の総括が、対外的インパクトの側面からは、革命モデルとしての有効性、革命の輸出、アメリカの地域覇権へのインパクト、地域大国としてのインパクトが手際よくまとめられ、それに加えて各分野における研究動向が簡潔に提示された。このように整理することにより、イラン・イスラーム革命とわれわれが語ってしまうとき、あるいは現在、イラン・イスラーム革命という言葉で何かを連想するときに抜け落ちてしまうものが明確に示され、今後の研究の大きな礎になったものと思われる。

続く酒井啓子氏による「イスラーム革命とサダムの30年——イラクの遅れてきた革命か？」は1979年という年に注目し、フセイン政権誕生から瓦解までの30年をイラン革命以降の30年と重ねあわせることによってイラクの政治状況を解き結ぶことを目的としていた。1979年はイラン・イスラーム革命が起こっただけの年ではない。エジプト・イスラエル和平、メッカ・カアバ神殿占拠事件、ソ連アフガニスタン侵攻とともにイラクではフセイン政権が誕生した年でもある。もちろ



ムフセイン政権誕生は当時のインパクトからすれば、イラン・イスラーム革命に及ぶものではないが、のちの湾岸戦争、イラク戦争につづく動乱の出発点となるという意味で、後付けで付与される重要性はもっている。フセイン政権は現象的に見れば、先進国や湾岸諸国から見た、イラン革命をはじめとする「危機」を「阻止」する存在であったが、そのフセイン政権がイラン革命への対処として行ったさまざまな政策がイラク国内でどのような意味をもっていたのかが丹念に解きほぐされていった。現在のイラクにおけるシーア派勢力の台頭は、フセイン政権が押しとどめていた「イスラーム革命」が30年遅れであらわれたと解するわけにはいかないが、フセイン政権が行った対イラン革命対処法の影響をしっかりと見定めておく必要があるとの言で結ばれた。

報告者：平野 淳一（京都大学）

イラン革命のインパクトについて、青山氏と末近氏はレバノン・シリアの地域動態に対する影響を中心に議論を行った。青山氏は、シリアにとってイラン革命は、政権が内外の不安定要因を牽制することを可能にさせるとともに、「戦略的均衡」を図り、中東における地域大国へと変貌する契機であったと位置づける。シリアは外的にはエジプトとイスラエルによるキャンプ・デーヴィッド合意によって、対イスラエル戦略の転換を迫られるとともに、内的にはシリア・ムスリム同朋団の破壊活動によって社会発展が阻害されていた。そのなかで発生したイラン革命をシリアは「国民解放」という側面を評価することで、国内のシリア・ムスリム同朋団を孤立させ、その殲滅に成功した。また不安定な中東国際関係の中でイランとのパートナーシップを構築することで「戦略的均衡」を図った。しかしその一方でシーア派組織の支援を通じてレバノンに干渉するイランと、レバノンにおけるパワーブローカーとしての地位を獲得し、対イスラエル武装闘争の主導権を目指すシリアの関係は必ずしも協力関係とは言いがたい側面もはらんでいた。青山氏はそうした両義的な関係からさらに踏み込んで、シリアの現状分析を行った。現在シリア国内に見られる「イラン脅威論」の陰に隠れて、「イラン」は東アラブ地域におけるシリアの影響を強化するという関係であると分析した。

続いて末近氏はレバノンのシーア派組織ヒズボラーの誕生した背景について他のシーア派組織との関連性を踏まえながら、その史的展開を明らかにした。レバノンのシーア派組織の古参であるアマルはバーザールガーン革命暫定政府と人的資源の問題も含め蜜月状態にあった。しかしアメリカ大使館占拠事件を背景にバーザールガーン政権がイランの政治舞台から退潮し、イラン国内ではイスラーム共和党が勢力を拡大した。こうした革命後の政権交替は次第に革命政府の方針とアマル指導部の方針の間に摩擦を生じさせた。加えてアマル内部でも指導方針をめぐる内部分裂が起こり、勢力を衰退させていった。こうしたレバノンのシーア派勢力の騒乱の中でヒズボラーが登場し、イランの革命防衛隊（パースダーラーン）との連携により勢力を拡大していった。末近氏はこれらの展開を踏まえ、ヒズボラーの位置づけに関し、流動的な国際関係に対応して流動的に組織が構成されていることなど、単に「イランの手先」に還元できない問題があることを明らかにするとともに、本発表を結成時と今日との間の連続性と断続性を明らかにする作業の一環であると位置づけた。

報告者：黒田 賢治（京都大学）

細井氏の発表は、イラン革命を契機としたイランと米国の関係悪化、さらにはイランに対する様々な経済制裁がとられるなかで、イランの貿易においてドバイの果たした役割に着目するものであった。発表では、様々な経済的指標やドバイを経由する対イラン貿易のメカニズムを示し、経済制裁の陰では先進諸国やイランの隣国がドバイからの再輸出という方法でイランとの交易を継続してき

たと論じた。また、海外直接投資の問題について触れ、この分野においてもドバイを利用した投資活動が活発に行われている可能性を指摘した。イランの直接投資をめぐっては、国際連合によるイランへの金融制裁に伴って、カントリーリスク（商業リスク以外に生じるおそれのある損失を示す指標）が悪化し、外国資本の投資意欲が低下した。そうした状況のなかで、ドバイに設置した特定目的会社（SPD）を通じて、イラン企業が UAE 企業として行っている経済活動がどの程度存在するのかについても、今後さらに検討していく意義があると述べた。

イランと UAE の経済関係は、20 世紀の初頭にイラン系商人がドバイへ移住したところから密接なものとなり、それ以来、ドバイは対イラン貿易における交易拠点としての地位を確立した。そして、イラン・イスラーム革命とそれに続くイラン・イラク戦争から今日に至るまで、対イラン経済制裁のなかで UAE とイランの密接な経済関係を利用した経済活動が行われていることが報告された。

続いて松尾氏により報告がなされた。イラン革命前のオマーンは、60 年代以来内戦状態にあった。オマーンの共産主義化を恐れる国々は内戦にも関与しており、革命前のイラン政府は内戦終結宣言が出された 1975 年以降もイラン軍をオマーンに駐留させていた。革命後、軍は撤退したものの新政府とオマーンの外交関係は継続されていた。一般的に、オマーンにおけるイラン革命の影響は、他の湾岸諸国と比較して小さかったといわれている。その理由として、オマーンとイランはホルムズ海峡を共有しているために敵対する必要がないという議論や、オマーンにおけるシーア派人口の割合が他の湾岸諸国と比較すると小さかったためという説明などが提示されてきた。上記の見解に対して、オマーンにおいて革命の影響が小さかったことの「積極的」理由を見出そうというのが本発表の目的であった。そのために、「湾岸型エスノクラシー」および「イスラームのオブジェクト化」という 2 つの議論を用いて革命当時のオマーンの様子が検討された。はじめに、「イスラームのオブジェクト化」についていえば、当時のオマーンでは近代教育制度が開始されたばかりであり、集合的アイデンティティや、他者としてのシーア派という関係は成立していなかったことが指摘された。さらに、インド系のシーア派住民が人口においても経済力においても大きな影響力を有していた。そのため、従属集団としてのシーア派というカテゴリーが存在しなかったと考えられる。「湾岸型エスノクラシー」についていえば、70 年代のオマーンではアラブ系オマーン人が支配集団を形成する途上にあり、官僚機構には近代教育を受けたザンジバル系住民が多く登用されている状況であった。また、1968 年に開始された石油の生産量は他の湾岸諸国のなかでも規模が小さく、さらに、アラブ系オマーン人内部においても階層分化がみられることなどから、オマーンにおける「湾岸型エスノクラシー」は完成しなかったと結論づけられている。

保坂氏の発表では、湾岸諸国の安全保障体制とシーア派ファクターとの相互関係について、広い視点からの枠組分析がなされた。湾岸の小国にとって、安全保障上もっとも重要なことは、独立および現体制維持のために周辺諸国や大国との合従連衡や協力体制をいかに図ってゆくかという点にある。20 世紀初頭においては、オスマン朝と英国が地域の安全保障にとって重要なアクターとなっていた。戦間期にあたる 1930 年代には領土の変更は一時停止され、英国がこの地域における覇権を握っていた。ところが、1970 年代になると英国が撤退をはじめ、代わって米国がこの地域の安全保障にとって重要な役割を果たすようになった。

しかし、イラン・イスラーム革命によって、イランとサウジアラビアを二本柱とする米国の対中東体制が崩れた。そして、イラン革命の影響を恐れた湾岸の小国とサウジアラビアは湾岸協力会議（GCC）を結成し、米国は GCC 諸国やイランと戦争を展開するイラクとの協力体制を強めた。いずれにせよ、湾岸諸国のシーア派ファクターは、地域大国であるイラン、イラクの影響を受けて

顕在化する傾向がある。

GCC 諸国における対イラン関係が大幅に改善されたのは、サウディアラビアのシーア派問題をめぐってイランとサウディアラビアが合意を形成した1993年のことであった。これによって、革命の輸出がストップされ、スンナ派とシーア派との共存の時期が訪れた。これは、歴史的にみても、ペルシアと対岸のアラブ諸国の関係が（少なくとも政府レベルにおいて）良好になった時期として捉えられる。

2000年代以降の湾岸安全保障とシーア派ファクターについていえば、現在GCCそれ自体は大きな対立を抱えていないといえる。その一方で、湾岸地域の周辺ではレバノンやシリアにおけるシーア派ファクターのインパクトが強まっており、イランはその動きと大きく連動している。このような状況に対して、湾岸諸国は慎重な態度を取っているのが現状である。

報告者：平松 亜衣子（京都大学）

#### KIAS ユニット4・SIAS グループ3 共催研究会 (2009年3月6日 於京都大学)

発表題目：“The Naqshbandi Sufi Brotherhood in Modernity and Globalization”

発表者：Itzhak Weismann (Department of Middle Eastern History, University of Haifa, Israel)

KIAS ユニット4・SIAS グループ3 合同研究会「スーフィー・聖者研究会」でイスラエルから Itzhak Weismann 博士を招聘し、2009年3月6日、3月9日の二日間にわたりそれぞれ京都大学と上智大学で研究会を行った。うち3月6日京都大学で開催された研究会では現代のナクシュバンディー教団の動向を主題とした。Weismann 博士は近現代シリアのナクシュバンディー教団の研究を専門としており、特にサラフィー主義とスーフィズムとの関係を扱った論考でよく知られている。著書に *Taste of Modernity: Sufism, Salafiyya, and Arabism in Late Ottoman Damascus* (Leiden: Brill, 2001)、*The Naqshbandiyya: Orthodoxy and Activism in a Worldwide Sufi Tradition* (London and New York: Routledge, 2007) がある。一般的に、スーフィズムは古い伝統に根差す文化であり、サラフィー主義や世俗主義に代表される近現代の文化とは異質なものであると捉えられてきた。しかし本発表では、スーフィズムの側から、グローバリゼーションによる急速な社会の変化に対応している例が紹介され、スーフィズムの新たな展開が示唆された。

発表の前半では、ナクシュバンディー教団の歴史が紹介された。この教団は、12世紀中央アジアのホージャガン教団に起源を持ち、14世紀中央アジアでナクシュバンディー教団となり、17世紀インドでムジャッディディー教団、19世紀オスマン帝国下でハーリディー教団という支教団を生み出してきた。ナクシュバンディー教団の主な特徴は、他のほとんどの教団のスィルスィラが4代カリフのアリーにさかのぼるのに対し、初代カリフのアブー・バクルにさかのぼること、教友の文化から逸脱していないという意味で、タリーカ・アッ＝サハーバ (Tariqat al-sahāba) と呼ばれること、声高のズィクルに対抗して、沈黙のズィクル (dhikr khafi) と呼ばれる儀式を提唱したこと、教団の絆となる信仰告白 (kalimat-i qudsiyya) を重視することの4点である。ナクシュバンディー教団の思想の特徴は、その創設者バハーウッディー・ナクシュバンド (1318～1389) や17世紀のアフマド・スィルヒンディー (1564～1624) らにみられるように、異端に激しく反対し、シャリーアを固く守る正統イスラームと自己規定し、積極的に政治参加を行うところにある。以上の点

を指摘した後、Weismann氏は、トルコのイスタンブールパシヤ・タリーカやウズベキスタン、中国などの同氏が訪問した各地の修行場 (khānqāh) の写真を用いて、ナクシュバンディー教団が広範囲に広がっているさまを具体的に示した。

発表の後半では、ナクシュバンディー教団が積極的に政治参加し、自身の正統性を主張したため、近現代のスーフィズム批判運動の矢面に立たされてきたこと、その過程を通じて時代の変化に対応する方法を模索してきたことが述べられた。その一例がシリアのムフティー、アフマド・クフターロー (1915～2004) である。本発表では、イスラーム内での改革に収まらない新しい形態として、他宗教との結びつきが指摘された。その顕著な例が、インドにおいてヒンディー文化と結びついたヒンディー・スーフィズムの例である。これに関連して、ニューエイジ運動と結びついたカリフォルニアのナクシュバンディー・ヒンディーセンターの例や、教団のシェイフによってホームページが開設されている例も紹介された。

発表後の質疑応答では、インドでのナクシュバンディー教団の対応を、スーフィズム一般の対応として論じることができるのか、他宗教と結びついた文化をスーフィズムと呼ぶことができるのか、さらに現在のインターネット全盛の時代にあつて教団はホームページを積極的に開設すべきかななどの質問がなされた。これらの質問に対し Weismann氏は、現象が一般的なものであるかどうかではなく、現に起きている現象を見据えることが重要だと説いた。ホームページ開設に対しては、インターネットによる思想の自由市場とネットユーザーの選択の自由が指摘された。

本発表は、内包的定義の困難さが論点となることの多いスーフィズムの現実の動態が手際よく提示され、非常に興味深いものであった。

報告者：園中 曜子 (京都大学)

**KIAS ユニット2・大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト共催研究会  
(2009年3月7日 於大阪大学)**

発表題目：「革命イランにおける「中道派」の模索——分析枠組みの構築に向けて——」

発表者：黒田 賢治 (京都大学)

発表題目：「前近代の『中道派』をめぐる三つの問題——「帝国」支配下の対応、土着信仰への浸透、シーア派的慣習をめぐる言説——」

発表者：小倉 智史 (京都大学)

「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクトとの共催で、KIAS ユニット2「中道派」研究2008年度第3回研究会が行われた。今回扱われるイランは後述のように既存の枠組みで「中道派」を指定するのがきわめて難しい。黒田発表はそれを乗り越えるために「公正としての正義」という概念を調査した野心的な試みである。また小倉発表は前近代の「中道派」を捉えるための視座を模索し、現代の「中道派」を相対化するために有効なものであった。

「革命イランにおける「中道派」の模索——分析枠組みの構築に向けて——」の発表者は最初に、「中道派」がおおまかに世俗主義でもなくイスラーム急進主義でもなく中庸を行く派として理解されていることを確認しながら、「中道派」がある二極の関係性の中で位置づけられる集団であること、そしてその関係軸は一つに限定されるとは限らないことを指摘した。そこで発表者は革命イランにおける「中道派」の動態を考察するための予備的議論として、「中道派」の存在を位置づけうる視

座を提示しようとする。具体的には革命イランの正義論、すなわち「ある行為の正しさを測るルールがどのように規定されているか」を手がかりとした。

正義論に入る前に、発表者は革命期の議会における党派展開を紹介しつつ、新たに制定されたイラン憲法において、法学者たちが政治における正義の基準を規定するという「法学者の統治」論が顕れたことを指摘した。当時のイラン議会では法学者への権限付与の程度をめぐる大きく二つの派が存在していた。IRP + トゥーデ派は「法学者の統治」論を主張し、一方でバニーサドル派は「法学者の監督」論を説いた。このような状況下暫定政府から発表された新憲法原案では法学者の政治的役割は限定されていた。しかし当時 IRP 党首であったベヘシュティーが憲法原案を加筆修正したことで、「法学者の統治」論を前提とする「不均等な権力構造」が誕生した。そこで発表者はイランの法学者に正義を測る権能を付与した人物、ベヘシュティー本人の正義論に注目して議論を展開させてゆく。そこに見られるのは「公正としての正義」である。

ベヘシュティーによれば、フクムを発する指導者は公正な者が選ばなければならない。公正(dādgar, 'idārat) な者とは、権利を抑圧したり侵害したりせず、調和がとれている(mo'tadel) 人物のことある。実際にはどのように公正な人物を選択するかが問題となるが、ベヘシュティーは人々が公正な人物を選ぶ際には、人々はその人物が公正であると確信しているから選ぶのであるとして、誰もが公正であると知っている人物、すなわちマルジャアを選ぶのが妥当であるとする。発表者はこのような正義論をもとに、ベヘシュティーが公正な人物の選択条件にマルジャイヤーを位置づけて、最高指導者の理論的正当性を確保していたのではないかとした。そして「公正」を正当性の理論的根拠とすることで、革命イランにおける「中道派」を捉える方法を提示できるのではないかとして発表を締めくくった。

質疑応答では、「正義('adl)」と「公正('idārat)」という二つの言葉の関係性を中心に議論が展開した。

報告書：小倉 智史(京都大学)

「前近代の『中道派』をめぐる三つの問題——「帝国」支配下の対応、土着信仰への浸透、シーア派的慣習をめぐる言説——」は、主にモンゴル侵入以降の前近代において、「中道派」を模索する際に顕現する三つの問題について明らかにし、前近代における「中道派」の実像への接近が試みられた。

発表者は前近代における「中道派」をめぐる問題として、第一に「帝国」支配下のムスリムの対応、第二に土着信仰への対応、第三にシーア派的慣習をめぐる言説への対応をあげた。ムスリムが住民の多数を構成し、イスラーム法による支配が定着している地域が、非イスラーム、あるいはイスラーム以外の慣習を持つ勢力によって征服されたなかで、支配者側のシャリーアに反する慣習と被支配者であるムスリム側による批判・抵抗」が大きな問題となった。このなかでシャイバーニー朝の事例から、異民族・異教徒の支配者とムスリムの被支配者は、シャリーアを共通の権威としながら、その解釈をめぐる微妙な共生関係を構築していたことを明らかにした。

一方、南アジアの事例から、第一の事例とは反対に少数のムスリムが多数の非ムスリムの土地を征服・支配し、イスラームの布教が行われ、イスラームという自己意識を持たない習合と土着信仰を不信仰として排除しようとする緊張関係が生まれた。発表者はこのなかでカシミールの事例を取り上げ、土着の信仰を包摂するようなイスラームの在り方と支配の側面における「イスラーム性」の補強を明らかにした。



これら二つの事例はイスラームあるいはムスリムの対他関係のなかで展開した問題であるのに対し、第三の事例ではイスラーム内部の党派対立・法学派間の対立である。フレグ・ウルス君主ガザンによるサイド崇拝の展開とスンナ派とシーア派の宗派対立の深刻化の中で、オルジェイトゥがフトバの際に正統カリフの名からアリー以下シーア派イマームの名を唱えるよう変更したことで、ますます事態が深刻化した。そのなかでクブラウィーヤのスーフィーでありスンナ派を自認していたスィムナーニーは、オルジェイトゥによるシーア派への改悛を批判的に受け止め、シーア派信仰を否定する一方で、宗派の枠組みを超えた「お家の人」崇拝を位置づけた。このようなスィムナーニーの立場は、同時代的には受け入れられるものではなく、シーア派として認識され、後代のシーア派の人物列伝にも組み込まれた。しかしながら発表者は、単にシーアとスンナの中間に立つのではなく、スンナ派を自認しつつシーア派的慣習を是認するという立場を「中道」的であったと評価した。

発表者はこれら前近代におけ「中道」をめぐる三つの問題を明らかにするとともに、前近代から近代への流れの中で両者に共通する「中道」性の問題、また同時代あるいは後代の社会への影響を明らかにすることを今後の課題とした。

その後行われた質疑応答では、発表者の用いた史料に着目し、「中道派」の正当性のために過去に溯るといった性質や、支配の正当性と「中道」性の関連に着目した質問が寄せられ、活発な議論が展開した。

報告者：黒田 賢治（京都大学）

#### IKIAS ユニット 4・SIAS グループ 3 共催研究会

(2009年3月9日 於上智大学)

発表題目：“The Islamic Other: Fundamentalism and Sufism in the Muslim World and Beyond”

発表者：Itzhak Weismann (Department of Middle Eastern History, University of Haifa, Israel)

20世紀に入り、近代やグローバル化と呼ばれる現象を経験してきたナクシュバンディー教団は、イスラームの内部に生じたムスリム同胞団などを中心に、スーフィズムを批判するさまざまな改革運動と接触し、ときには衝突や論争が生じ、またときには協調関係を構築するなど、複雑な展開を見せてきた。そればかりではなく、近年北米を中心とする多宗教的が混在する状況の中で、「非ムスリムのスーフィー Non-Muslim Sufi」の出現や、「タサウウフの無いスーフィズム Sufism without Tasawwuf」などの現象が見られるようになった。

グローバル化に伴い、ナクシュバンディー教団が原理主義者だけでなく他宗教と接触する中で、ナクシュバンディー教団のシャイフたちが、それらに対してどのように挑戦し、どのように共生の道を探っているかを、世界各地の事例を挙げながら論じた。20世後半以降、新たなシャイフの形態として北米に住むインド系のナクシュバンディー教団に関する事例をとり挙げ、心理学をはじめとする西洋近代的な学問体系との結びつきについて論じた。

Weismann氏は、「近代」や「グローバル化」という状況を考えるとき、ナクシュバンディーであることのもっとも重要な要件が、「ムスリム」であることを示し、前近代のシャイフを中心とする師弟関係やイジャーズの問題はもちろん、「アブラハムの理解」に依拠しながら、合衆国に拠点を置く教団組織を事例に、キリスト教徒もユダヤ教徒も取り込んでいくという状況を説明した。また、シリアでは、ハマー暴動などに象徴される事件があったにもかかわらず、クフターローがアラウィー

派の世俗主義体制側と共存している事例や、デーオバンド派との協調関係などを挙げ、スンナ派以外のセクトやナクシュバンディー以外の教団組織とも共存している状況を説明した。

報告者：若松 大樹（京都大学）

### CIAS ユニット4・SIAS グループ3 モロッコにおけるスーフィズム・聖者信仰調査

期間：2009年3月9日～3月19日

国名：モロッコ

参加者：

斎藤 剛（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・非常勤研究員）

小牧 幸代（高崎経済大学地域政策学部・講師）

仁子 寿晴（人間文化研究機構・研究員／京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・客員准教授）

高尾 賢一郎（同志社大学大学院神学研究科・博士後期課程）

関佳 奈子（上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科・博士後期課程）（現地参加）

白谷 望（上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科・博士前期課程）（現地参加）

#### 1. 調査対象と内容

本調査では、(1) フェズ、メクネス、メクネス市近郊、マラケシュ、マラケシュ近郊における聖者廟を対象として実態調査とあわせて、(2) フェズ、カサブランカにおいてタリーカ、聖者信仰と関連する文献資料収集を実施した。

##### (1) タリーカ・聖者信仰の実態調査

メクネス：スイディ・ムハンマド・ベン・イーサー廟（注：廟名に下線が付されているのは、預言者生誕祭ないしは聖者祭が開催されていたものである。）

メクネス市近郊：スイディ・アリー・ベン・ハマドゥーシュ廟

フェズ：ムーレイ・イドリースⅡ世廟、ザーウィヤ・スイディ・アフマド・ティジャーニー（スイディ・アフマド・ティジャーニー廟）

マラケシュ：「7聖人」の諸廟（スイディ・ユースフ廟、カーディー・イヤード廟、スイディ・ベル・アッパース廟、スイディ・スライマーン・ジャズーリー廟、スイディ・アブドゥルアズィーズ廟、スイディ・ガズワーニー廟、イマーム・スハイリー廟）

マラケシュ近郊：ムーレイ・ブラヒーム廟

モロッコでは、毎年全国各地で聖者祭（ムーセム）が開催されている。その開催日程は、農耕暦に従って夏に開催されるものと、ヒジュラ暦3月12日にあたる預言者生誕祭と同じ時期に開催されるもののいずれかに大別される。

本調査の調査日程は、本年の預言者生誕祭が西暦2009年3月9日にあたることを念頭におき、可能な限り、これに間に合うように設定されたものである。結果として、本調査班は、参与観察を通じて、スイディ・ムハンマド・ベン・イーサー廟、スイディ・アリー廟、ムーレイ・ブラヒーム廟などにおける預言者生誕祭（ないしは聖者祭）の概要を把握することができた。

このほか調査を通じて、主に以下の諸点に関する知見を得た。各聖者廟における参詣の実態（参詣の方法、参詣客の性別の概要、参詣に伴う供物の内容、祈願の方法など）、廟の空間構成の概要、7聖人については各廟や末裔間の関係、部族民と聖者の関連性、廟における儀礼の一部としての預

言者讃歌の重要性、などである。

本調査班は、思想研究（仁子）、地域研究（高尾、シリア）、人類学（小牧[インド]、斎藤[モロッコ]）など異なる学問分野と地域を対象とした研究者から成り立っている。こうした異なる学問分野、フィールドにおける調査経験を有する参加者の知見をもとにして、モロッコにおける聖者信仰の特質について、多角的な視点から明らかにするための糸口を得ることができた。

たとえば、高尾は、今回の現地調査を通じて、モロッコでは預言者生誕祭と聖者祭が大規模に行なわれるが、その分現地関係者の部外者に対する警戒心は強いという印象を受けている。これは、シリアの場合とは逆だと言ってよい。この点は、当該社会における宗教活動の存在意義の違い、また宗教儀礼やスーフィー教団の活動が部外者の目にどのように映るのかという意識の差異を今後検討していくうえでの手掛かりともなりうる。

また、インド・パキスタンでは、個人的祈願に際して金銭、供物（花、菓子、バラ水、線香、ロウソクなど）、食事などを媒体とした積極的な贈与交換が展開されるのが普通である。しかしながら、モロッコではそのような情景が見えてこなかったために、小牧はインドにおける贈与交換の社会的意義について再検討をする可能性を見出している。

## (2) 文献資料調査

フェズ：ヒザーナ・カラウィーイーン

フェズ：旧市街および新市街

カサブランカ：ホブース地区

ホブースではモロッコ出版の書籍を多く取り扱う書店を幾つか巡ることができたが、地方都市ではエジプト系出版、あるいはシリア・レバノン系出版の本に偏重した書店が多いという印象を高尾、仁子は受けている。これは単純に都市の規模の違いというよりも、むしろ思想的偏重が都市ごとにあるという事実を示唆しているのではないかと、高尾は考えており、次回調査の際には、今回寄ることができなかったラバトも比較の対象に含めて、シリア、レバノン、エジプトにおいて出版された書籍のモロッコでの流通の現状について検討することを視野に入れている。

また調査班は、世界最古の図書館の一つであること、ならびに『ニコマコス倫理学』のアラビア語訳が発見されたことでも有名なカラウィーイーン図書館を訪問し、写本および刊本の所蔵状況を、仁子が中心となって調査した。既刊の写本カタログ *Fihris Makhṭūṭāt Khizānat al-Qarawīyīn* (4 vols.) に掲載されているもの以外にも多数の写本を有し、未製本状態でそのカタログの第5巻が存在すること、写本そのものは見ることができないが、すべての写本がすでに画像データになっており、画像データに関しては閲覧が自由であることがわかった。またそれ以外にもデジタル化が急速にすすんでおり、モロッコの他の図書館とリンクさせた蔵書データベースも構築中であった。刊本の収集も現在まで継続的に行われており、タフスィールや法学関係は言うまでもなく、神学・哲学関係にいたるまで万遍なく収集されており、しかも良書がきちんとおさえてあった。しっかりした司書がじっくりと所蔵図書を選定しているのであろう。同図書館は、たんに古い写本を有しているだけではなく、現在でも図書館としての機能を充実させようとしており、いまだ現在進行形の学問の拠点たらんとする意気込みのあることが推察された。

報告者：斎藤 剛（京都大学）